

私と映画『第三の男』

1：中学校の図書室で

私が映画『第三の男』の存在を初めて知ったのは、中学3年の時(後に知ったのですが、『第三の男』の日本公開の翌年)です。当時、中学の図書部に属していた私は、放課後になると図書室に窓口や整理仕事の手伝いの傍ら、他の部員とおしゃべりをしに行くのを日課にしていました。

ある日、このおしゃべりの話題が「一番好きな映画音楽は？」ということになりました。私が推したのは『真昼の決闘』のテーマ曲、小学校以来のともだちの女子部員が強く推したのが『第三の男』のテーマ曲でした。お互いに相手の推す映画を見ていなかったのも、その場は結論の出ないおしゃべりで終わりましたが、彼女が初恋の人的存在であった私の中には『第三の男』というの名前が強く刻み込まれました。

それから間もなく、当時、大阪の四つ橋にあった旧「文楽座」で「名画週間」とかでこの映画が上映されることを知って見に行き、あっさりこの映画とキャロル・リード監督の虜になってしまいました。リード監督の作品はこの後、『邪魔者は殺せ』、『落ちた偶像』、『文化果つるところ』、『二つの世界の男』、『文無し横町の人々』、『空中ブランコ』などほとんど見ましたが『第三の男』以上の作品には出会いませんでした。以来、『第三の男』は生涯を通じて私の「洋画ベストワン」であり続けています。

なお、『第三の男』の主題歌ですが、映画を見てすぐ、国鉄大阪駅構内にあった専門店でレコードを探しに行ったのですが、当然サウンド・トラック盤やアントン・カラスのチターのレコードは発売されておらず、DECCA RECORDS から出ていたガイ・ロンバート楽団演奏のものを買って帰りました。A面は「THE 3RD MAN THEME」、B面は第2主題歌とでも言うべき「CAFÉ MOZART WALTZ」です。このSPレコードは今でも大切に保存しています。

2：塾からの帰り道で

『第三の男』を見た年の秋の夕暮れ、当時通っていた英数塾からの帰り道で、塾友四、五人と『第三の男』について話しながら歩きました。テーマはラストシーンにおける「アリダ・ヴァリ扮するアンナのジョセフ・コットン扮するマーチンスに対する感情は如何？」というものでした。ハッピー・エンド好きだった私を含め、大勢は「やがて時が来れば、二人は恋人同士になる」説でしたが、一人「アンナの心は冷えており、あの両者は生涯二度とまみえるこ

とはないだろう」説を強調したのがいました。後にこの映画製作途中で「両者が腕を組んで画面から去っていくラストシーン」を主張する原作者のグリーンと「あの有名なすれ違いのラストシーン」を主張するリード監督の間で対立があったが、結局リード主張のラストシーンとなり、映画完成後グリーンもリードの完勝を認めたというエピソードを知り、半世紀以上前の夕暮れに少数意見を強調した塾友の表情を懐かしく思い出しました。

3：私にとっての『第三の男』

今から思い返すと中学生の私がこの映画に強く魅かれたのは、単にストーリーが良かったとかでもキャストが素晴らしいとかにかよるのではなく、ロバート・クラスカーが撮影した戦後間もなくの荒廃したウィーンの街の、特にその夜間の「映像美」や、時に軽やかに、時にドラマチックに激しく、時に哀愁を帯びてメランコリックに全編を流れた「チターの調べ」も含め、映画全体が混然一体となって醸し出す総合的な印象だったのだらうと思います。

さらに言えば、『第三の男』は、この映画を知るきっかけとなった図書部の女友達や塾友やそれらを含む環境、生活のすべてを包め、青春前期とも言うべきその時代に私をフラッシュバックさせるキーワード的存在になってしまったといってもよいようです。

今回、上映会の手伝いで「りぶら」でいろいろ調べたのですが、この映画に対して私と同じような特別な感慨をお持ちの著名人が多くおられることを知りました。萩 昌弘氏、水野 晴郎氏、篠田 昌弘氏、色川 武大氏、手塚治虫氏、猪俣勝人氏・・・など。

また、「ヤフーの映画ユーザーレビュー」を詳細に調べて、映画館の暗闇でこの映画に触れた旧世代のみでなく、DVDやビデオで初めてこの映画に触れた最近の比較的若い世代の中にも、この映画の魅力に強く感応するファンが多く存在することも知りました。これらの体験に勇気を得て、今後も「私の洋画ベストワンは『第三の男』である」との看板を上げ続けようと思っています。

私はこの映画を何度も観ているのですが、映画館で観たのは半世紀以上に2度だけで、あとは、TV・ビデオ・DVDです。何とかもう一度この映画を劇場的環境で見たいなーと常々思っていたのですが、今回やっとその夢がかなえられることになりました。

K.M

2011.4.14

vol.10

『第三の男』

シネマ・ド・りぶらの
コラム・ド・シネマ

「思い出」

りぶらサポータープロジェクト「シネマ・ド・りぶら」にて『第三の男』をLibraホールで上映が決定した。私にとって、カンヌ映画祭グランプリ受賞作品である『第三の男(ザ・サードマン)』は、今まで1000本以上見た映画の中でも、忘れられないベストスリーに入る作品である。

日本での初上映は、57年前の1952年であり、私も10代の多感な時期であったこともあり、映画のストーリー、そしてテーマソングに最高のショックを受けたのを記憶している。早速、りぶらにて『第三の男』のDVDとグレアム・グリーン原作小津次郎訳の本を借用し、何度目かの再見をした。

映画のスタッフ、キャスト、あらすじはご案内でご承知の事だと思いますが、第二次世界大戦後、米英仏ソの四カ国による四分割統治下にあったオーストリアの首都ウィーンが舞台であり、アメリカの作家ホリー・マーチンスが親友ハリー・ライムを訪れるところから始まり、意外な物語がサスペンスに展開される。モノクロであるためにリアル感と想像力も働き、アントン・カラスのチターによる切ないテーマソングが劇中に流れ、上映時間の105分が短く感じられた映画であった。

特に私が感動したシーンは、ウィーンの墓地の長い一本の並木道を色々な思いを胸にして、アリダ・ヴァリがコートに両手を突っ込んで、もう一度だけ会いたい人として待っているジョセフ・コットンの前を、眼ひとつ動かさなく歩き去っていく彼女。それを無言で見送るコットンのタバコの煙り、そして最高のボリュームで流れるテーマソング、印象に残るシーンであった。 S.N

「本と映画」

はるか昔に見た「第3の男」。コラムを書くに当たって、映画の方は本番にとっておき、本を読んでみようと思いました。グレアム・グリーン全集11「第3の男」(小津次郎訳 早川書房)を、図書館で借り、読み始めました。物語があって、それを映画にしたのかと思ったのですが、序文に

は「読んでもらうためにではなく、見てもらうために書いたものだ」で始まっていました。結末についても監督キャロル・リードと違っていたけれど、リードの巧妙な演出とカラス氏の素敵な曲に賞賛をしています。本文では、ロク・マーティンズの訪れた当時のウィーンの状態を説明しています。むかしの魅力的なウィーンではなく、戦争で破壊され、4大国(ソ連、イギリス、アメリカ、フランス)に分割された状態。「みすばらしい廃墟の町で、雑草の生えるにまかされた場所の観覧車だけがメリーゴーランドの土台の上に打ち捨てられた石臼のようにゆっくり回転している。」と書かれています。昭和57年3月発行の本で、細かい文字と2段組の構成と読みにくいものの、その後で映画を見ると、画面の後ろにあるものがわかり、おもしろさが増しました。 M.Y

「第三の男」とチター

「第三の男」は、映画よりもアントン・カラスがチターで奏でる「ハリー・ライムのテーマ」のメロディのほうが、早くから私の記憶に残っています。弦をはじく音色はギターとは異なりチェンバロにも似ていて、学生の頃、ラジオを聴きながら、どんな楽器かを想像していました。『ウィキペディア』で見つけた「チター」は、添付した映像に有るように、三十数本の弦を持つ、スイスやオーストリアの美しい民族的楽器です。

映画の冒頭で「チター」で奏でられるテーマ曲と、何本かの弦が弾かれる映像は、これから始まる物語を暗示しているようです。アントン・カラスはウィーンで学費を



稼ぐためホイリゲ(居酒屋)でチターを弾いているのをキャロル・リード監督に見出され、この映画全編に流れる音楽を担当し、緊迫感ある映像と音楽が組み合わせられ、鑑賞者の心を物語の中へ引き込みました。 A.U

今でも海外へ行くと、つい名作の舞台を訪ねてしまう。…現地の人は勘違いして新しく大きな観覧車をつくった。ホントは古い木造のに乗って、オーソン・ウェルズをきどりたいの…。@塩田丸男

処女作の「4万年漂流」は『第三の男』みたいな場面ばかり。僕がベタ、つまり黒っぽい画調を好むのもあの映画のせい。ロバート・クラスカーの撮る夜のシーンの美しさには正直しびれました。@藤子不二雄 A

『第三の男』
フィルムデータ

原 題: The Third Man
製作年: 1949年
製作国: イギリス
時 間: 105分

監督: キャロル・リード
脚本・原作: グレアム・グリーン
音楽: アントン・カラス

出演: オーソン・ウェルズ
アリダ・ヴァリ
ジョセフ・コットン
トレヴァー・ハワード

りばらサポータープロジェクト 「シネマ・ド・りばら」
『第三の男』 関連図書案内
& DVD

キャスト

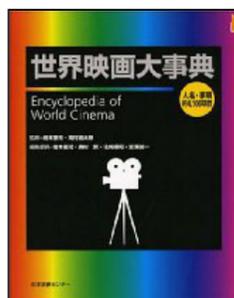
778 『オーソン・ウェルズ偽自伝』
バーバラ・リーミング：著
文芸春秋

N 778.2 近代映画社
『20世紀のグレートスター
100& 外国映画の代表作 250』

778 『世界映画人名事典
男女優編』
嶋地 孝磨：著 キネマ旬報社

778 キネマ旬報社
『外国映画監督・スタッフ全集』
『外国映画俳優全集 男優編』
『外国映画俳優全集 女優編』

778 『世界映画大事典』
岩本 憲児 著
日本図書センター



監督：キャロル・リード

N778.2 共同通信社
『20世紀の映画監督名鑑 (Mook21)』

N778.0 『サスペンス映画の研究』
植草甚一著 スクラップブック 5 昭文社

778.2 『オリバー!』 アイ・ヴィー・シー

778.0 『事典 映画の図書』
辻 恭平 著 発凱風社

778.0 キネマ旬報社
『世界映画人名事典 監督 [外国]』

778.4 『巨匠たちの映画術』
西村 雄一郎：著 キネマ旬報社



原作：グレアム・グリーン

S933 『第三の男』ハヤカワ epi 文庫
グレアム・グリーン 著 小津次郎 訳



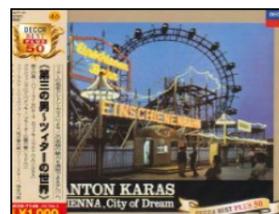
778 『字幕は翻訳ではない』
清水 俊二著 早川書房

N 778 『映画検定・公式テキストブック』
キネマ旬報映画総合研究所 キネマ旬報社

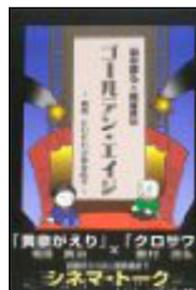


1E 『第三の男 ツィターの世界』Decca ア
ントン・カラス：演奏

音楽



763.2 松山 祐士
『映画音楽大全集1』
ドレミ楽譜出版社



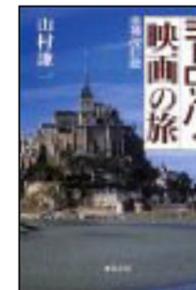
N778.0 山村謙一 著 弦書房
『ヨーロッパ・映画の旅』

778.2 飯田 道子 著 三修社
『映画の中のベルリン・ウィーン』

N 778.2 瀬川 裕司 著 青土社
『映画都市ウィーンの光芒』

N 778.2 狩野 良規 著 国書刊行会
『スクリーンの中に英国が見える』

舞台：ウィーン



映画評

N778.0 『今日も映画日和』文芸春秋
和田誠、川本三郎、瀬戸川猛資 著

N778.0 『ゴールデン・エイジ
~映画それぞれの黄金時代』
博文舎 岡村正弘 X 梶尾真治 著

N778.0 『いい映画にはいい雰囲気がある』
上原徹 著 アートダイジェスト

778.2 『キネマ旬報ベストテン 80』
淀川 長治・佐藤 有一：共著 清流出版

N 778.2 『ワールド・シネマ・ヒストリー』
アンドレア・グローネマイヤー 著 晃洋書房

N778.0 丹野達哉 取材・文 小学館
『私の忘れ得ぬ映画ベスト10 プラス1』

N778.0 『映画行脚』河出書房新社
池波正太郎、淀川長治 著

N 778.2 吉村 英夫 著 大月書店
『老いてこそわかる映画がある
—シニアのための映画案内』

N 778.2 『映画のどこをどう読むか』
ドナルド・リチー 著 スタジオジブリ

N 778.2 『光と影の世紀 映画史の風景』
岩本 憲児 著 森話社

